域地―ikichi―

作　サカイリユリカ

■登場人物

男１　山に自殺しに来た青年。
男２　登山家。未踏の地を目指す。
男３　山に住み、山と共生しようとしている男。世捨て人。

女１　麓の村に住む、水を求めてきた女
女２　鎮魂を祈る女（巫女）
女３　体が山と一体化している。

《プロローグ》

舞台上には、ロープが張り巡らされている。
深々とした霧がかった深い山の中の森。
昼間なのにあたりは鬱蒼としており、陽の光はわずかにしか漏れてこない。
少し遠くから滝の流れ落ちる音が聞こえてきている。
巨木と、ぽっかりと大きな口をあけた穴。

男1が地に倒れこんでいる。
女3が一人、佇んでいる。

女3　風が変わった。
ここにあってないもの。
誰が私に触れるだろうか。

女3、辺りを歩き回り、やがて男1を発見する。
女3、男1の近くで何かをささやき、
またつかず離れずの場所へと歩を進める。

男1　まただ。まただよ。
どうして死ねないんだ。

男1、巨木を見上げる。

男1　いったいお前は何年生きているんだ？
まあいい。
今日もまた昨日の繰り返しだ。

男1、静かに目を瞑るとその場で待つ。
男2、後ずさりながらやってくる。
ロープの一つに布きれが結んであるのを発見して、落胆する。

男2　またここだ！
なんだなんだなんなんだ、
一回りしてきたと思ったら、
どこまで行っても、山、山、山。
まったく、冗談じゃありゃしない。

ああ、この大きな木もさっきあったような・・

男２、男１を発見する。
驚いて駆け寄ろうとして、つまづく。

男２　あッ！
男１　大丈夫ですか。
男２　こ、こんにちは・・・
男１　あ、どうも。
男２　え、あなたもその、この山に登られて？
男１　えっ、あ、はい、そう、ですね・・
男２　そうでしたか。いやあ、奇遇だ。
　　見てください、その布っきれ。
　　結んだんですよ。
　　そしたら迷わないかなって。
　　でもまた同じところに辿り着いちゃいましたよ。　いやはや困った。
男１　足平気ですか。
男２　いやあ・・あれ？
　　うわ、これやっちゃったなあ。
男１　骨？
男２　いやそこまでは。たぶん。
　　でも痛・・
男１　かわいそうに。
　　でもちょっとうらやましい。
男２　はい？
男１　私も骨折したい。
男２　なにを？
男１　動けなくなるでしょ。いいじゃないですか。
男２　はあ。
　　え、何を。
男１　単純なことです。待ってるんですよ。
男２　あ、助けを？
男１　いいえ、死ぬのをです。
男２　えっ。
男２　どのくらいここに？
男１　さあ。
男２　覚えてないんですか？

男１　薬は飲んでも飲んでもただ寝るばっかりで、
おまけに首を吊ろうにも枝が細くてかなわない。
ふざけんなって話ですよねぇ。
男２　こっちがどれだけ努力してると思って。
男１　いやそれは、あの、
だからこうして放って置いてるんです！
でも案外しぶとくて。
男２　もうやめたほうがいいのでは。
男１　やめるもやめないもありますか！
もう何もかも捨ててきた。
いまさらどこにも行くところなんてない！
男２　はあ。ではどうしろと。
男１　見なかったことにして。
男２　いや無理ですよ。
男１　放っておいてください。
あなた迷ったんでしょう。
男２　ええまあ。
男１　早く帰った方が良いですよ。
死にたいわけじゃないなら。
男２　そうしたいんですがね。
ロープ、持ってきてたんですよ。
それで入り口の木にくくりつけて、
ちょっとずつ伸ばして歩いてたんですね。
ほら、アリアドネの糸とかっていう話があるじゃないですか。
それ的な感じで、帰り道がわからなくならないようにって。
でもなんだかね、ロープが他にもいっぱいあって
自分のロープがどれだかよく分からなくなっちゃったんですよ。
おまけにロープの長さが全然足りなかった！
この森の深さを見くびってましたね。

女３、口笛を吹き出す。

男２　何か聞こえません・・？
男１　さあ。何かいるんじゃないですか。
男２　待ってくださいよ！何かいるって・・どういう。
男１　そりゃ動物とか。
男２　嫌ですよこんなところで襲われるなんて！

男２、近くの木によじ登ろうとする。

男１　無理ですよ。
男２　ああもう、どうすれば。
　　あなたもいいんですか、そんなところで。
男１　好都合です、むしろ。
男２　本当にここは恐ろしいところだ。
　　来なきゃ良かった・・
男１　私が聞くのもアレですけど、何故ここに。
男２　この山を登りたくて。
　　でも反対側は、むきだしの岩場でとても登れたもんじゃない。
　　こっち側からならいけると思ったのが間違いだ。
男１　はぁ。
男２　歩いて歩いて歩き回って歩き疲れて、
　　途方に暮れていたんですよ。
　　薄暗い木陰に森が揺れて、ふいに辺りが静かになった。
　　そのとき、ひやっとした風をどこからか感じたんです。
　　首筋を撫でるかのような、一瞬の。
　　誰かの叫び声が、長い長い叫び声が聞こえた気がしました。
　　こんなに静かなのに、ですよ。
　　僕はとたんに体の芯が震えて、その場に立っていられなくなって、
　　ひどいめまいでした。
　　まるで自分が何もできやしない赤子になったような気分でした。
　　気づくと手も足も投げ出してました。
　　そこからはどこをどう歩いたか覚えてませんが、
　　気づいたら荷物も何もほっぽってきちゃった。
男１　そんなことが。
男２　だからここには何かおそろしい・・
　　あれ？
男１　どうしました？
男２　いや、水の・・滝？
男１　ああ、この山、あるみたいですよね。
男２　ずっと、してましたっけ、音。
男１　どうでしたかねぇ。
男２　なんだか気味が悪い。
　　僕は、早くこの森を抜けたいんです。

男１　どうぞご自由に。
男２　あなたもこんなところにいないで
一緒にいきましょう。
男１　嫌です。
男２　別にあなたがどうしようとかまいませんけど、
とにかく僕を助けてください！
男１　知りませんよ。
男２　この足！あなたのせいですから！
男１　えっ？
男２　責任取ってください。
男１　いやいや困ります。
男２　いいから、

男１、その場から去ろうとする。
男２、すがるように足を引きずりながら男１の後を追う。

《シーン１》

女１が彷徨いながらやってくる。

女１　ないないないない。
この山に滝があるっていったのはどこのどいつだ。
おかしい。音は聞こえているというに。
ああイライラする。
早くあの子に水を・・水・・・

女１、地面に腰を下ろす。

女１　くたびれた。
水、飲みたい・・

女１、目を閉じかけたところに女３が近寄る。
女３が一周くるりと辺りを周る。

女１　ああ、なんだってこんなに眩しいんだ・・
お日様が今にも私を焦がしてしまいそうだよ。
ん？今なんだか変な匂いが・・・

女、辺りを見渡す。

女１　嫌だねぇ、気味が悪い。
山で異臭を嗅いだら、死人が傍にいるって・・

男１、男２が迷い込んでくる。

男１　ついてこないでください。

男２、布きれの結び目を発見する。

男２　見てください、まただ。
男１　さっきの場所ですね。
男２　しーっ。
男１　誰か、あそこにいませんか？
そんなわけ・・

男１、女１を発見する。

男１　ああまた！
女１　（驚いて）人！？
男２　女性の方・・
男１　これ以上誰にも見つかりたくないのに、
どういうことなんだ。
女１　何です、あなたたちは。
ここらへんの人じゃありませんよねぇ。
少なくともうちの村では見たことのない顔だ。
男２　村。
良かった、君、良かったよ！
これで僕たちはもう助かったも同然さ！
（女１に）あの、僕たちですね、
たまたまさっきここで会ったんですけれど・・
２人とも道に迷ってしまいまして・・
男１　その、村というか出口まで案内していただけないでしょうか？
女１　いやいやいや。
男２　はあ？
えっ？

女１　そんなのこっちが聞きたいね！
男２　あの、もしかして・・
女１　なんだい？
男２　あなたも、道に迷ってらっしゃるんですか？
女１　あぁ！水！水はどこだ！
男２　なんですか水って？
女１　綺麗な水がね、欲しくてね。
男２　あぁ、そういえばこの山、滝があるとか。
男１　音が、してますもんね。
女１　それがさ、滝の音を頼りに歩いてたのにいつまでたっても辿り着けやしない。

遠くの方から滝の流れる音が聞こえる。

男１　その滝、どのくらいの高さがあるのかな。
男２　滝つぼに飛び込むってのもオツだな。
女１　馬鹿なこと。
男２　こっちは子供の命かかってんだよ！
男１　え、あ、なんかすいません。
女１　お子さん？
男２　村の近くの川は枯れて、
井戸から汲んだ水は泥が混じってとても飲めたもんじゃない。
それで水を汲みに来たってわけなんですか？
でもあなた、何も持ってませんけれど。

間。

女１　話すんじゃなかった。
男１　ムダに喉乾いたわ。
男２　もう動かない方が良いんです。
男１　汗がべったりあふれてくるばかりで。
男２　脱水症状になりますよ。
男１　こんな中ずっといたら。
女１　じりじり干からびていくのもいいかもしれませんねぇ。
男１　でも時間かかりそうだな。
あんたはどこから来たの。
あっちからです。

女１　はぁ？
　　あんたは？
男２　いや僕はその、そっちから。
女１　なんで。
男２　え、あぁ、あの、この山に登ってみたくて。
　　ここ地図に載ってないんです。
　　そんな山のてっぺんを、踏みしめたらどんな景色が
　　見えるんでしょうねぇ。
女１　死ぬ気かい。
男２　え？いやいや。むしろそれはこっちの人で・・・

間。

男１　・・もういいでしょう。
　　私はいきます。皆さんご無事で。

男１、去ろうとする。

男２　だから待ってください！
　　僕の足の責任とれっていったじゃないですか！
男１　ほっときゃ治るでしょ。そんくらい。
男２　治るまで肩貸してください！
男１　はぁ人と会ったが運のツキだ。
女１　ほんとに死ぬ気あるのかお前。
男２　やめましょうよそんな言い方。
男１　すみませんけど、私はもう何日も前からここにいるんだ。
　　この山で首くくれると思い込んでた。
　　けど、なんだ。いざ来てみたら枝の落ちてる木の多いこと！
　　ふざけんなってんだ！
　　待ってても弱るどころかまだピンピンしてやがる。
　　くそ、ちくしょう！
女１　うるさいねぇ。
　　さっさと滝見つけて飛び込みな。
男１　ええですから見つけますとも滝を。

男１、去ろうとするがふらついて倒れ掛かる。

男２　大丈夫ですか！
男１　あぁ、やっぱりこのまま待つか。
女１　知るか。あぁ、水はどこだい。
男２　このままだと３人とも死んでしまいかねませんよ。
女１　はぁ、やっぱり行くほかないな・・

女１、立ち上がろうとする。
女３、女１の傍によって息を吹きかける。

女１　ひっ・・

女１、辺りを見渡して身震いする。

女１　やっぱり今日はもう疲れたから、
その穴ぐらででも休むか。
男２　何を言ってるんですか、
ここで夜を明かそうとしてます？
無理ですよ、どうするんです、何かあったら。
あなた夜の山ってどれくらい暗いか知ってますよね？
何が襲ってくるかも分かったもんじゃないし、
やっぱりここを離れるのが・・
女１　山の暗さを知ってるから、今日はもうここを逆に
動かない方が良いと思ってるんじゃないか。
男２　なんかさっきと言ってることが矛盾してません？
せめて一緒に水を探しに行きましょうよ。
女１　嫌だ！
男１　どうしたんです？
女１　やっぱりこの森は、滝なんてないのかもしれない。
ずんずん山を歩いて歩いて、あたしゃ耳が良いからね、
だんだん滝の音が大きくなる方へなる方へって足を進めていたんだ。
そうしたら大きな木ばかり生えている場所に行きあたってね、
なんていうか、上を見ても右を見ても左を見ても
ぐるぐるぐるぐるしていて、そのうち音がぴたっと止んでさ、
思わず身体の力が抜けて、その場に倒れ込んでしまった。
自分が誰だったか、何のためにここに来たのか、
そんなこと全体どうでもよくなって、
ただ背中に感じる冷たい湿った土の感触と

男１　顔の横にあるカサカサした葉っぱの匂いを嗅いでいた。
女１　それで、気が付いたらここに？
いや、それからしばらくして、しばらくったって
一瞬の事だったのかもしれないけれど、あたしは急に怖くなった。
なにが怖いのか、さっぱり分からないんだけれど
体がぞくぞくと、何かに震えだして、
この場にいちゃいけないと咄嗟に感じて、
這い出すようにその場を去った。
男２　そんなとき、持ってきた桶の事なんか気にかけてられるかね。
・・やっぱりこの山には何かあるんですよ。
僕も似たような体験をしたんです。
なんなんでしょうね・・

間。

男１　あぁ・・・このまま溶けてしまえたらいいのに。
男２　やめてください。
女１　・・・・水・・・

間。

男２　飲みたいですね・・
女１　え？
男２　いや水です。
さっきから喉がねばっこくてかなわない。
男１　汗で目が痛い。
死ぬ前に顔くらいは洗いたいもんだなあ。
男２　なにを悠長なことを。
まあでも、とりあえず日が暮れないうちに水探しましょうよ。
女１　こんな中、また歩き回るってか。
ああもうこの音が逆に惑わせるよ。

間。滝の音が聞こえている。

男２　しーっ。よく耳を澄ませて。

男２、慎重に辺りを見渡して、

男２　ここから水の音が・・・

男２、土の割れ目のような穴を覗きこむ。

《シーン２》

男２、突如として体をのけ反らせる。
穴から男３が顔を出している。

しばしの沈黙。

男３　見世物じゃねぇぞ。
男２　あの。
男３　見るな。失せろ。
まさか俺を連れ戻しに来たんじゃないだろうな？
俺は帰らんぞ、ここから動くつもりはない！
（わけのわからない言葉でわめく）
女１　なに言ってんの。知らないわよ。
男３　嫌だ、絶対に街へは帰らないぞ！
やめろ、俺に構わないでくれ！
ここで静かに暮らしてたいんだ、
どっか行け、早く消えてくれ！
男２　あのすみません、
ちょっと落ち着いてくださいよ！
男１　えーと、私たちはあなたに危害を加えたりはしません。
勝手に入って来ただけですから。

間。

男３　・・なんだ、勝手に入ってきたのか。
男１　でもここ、あなたの山じゃないでしょう、別に。
男３　ああそうさ、別に俺の山じゃない。
でも誰の山でもない。
とにかく用がないなら帰った帰った。
男２　もしかしてこちらに・・
住んでらっしゃるんですか？
男３　そうだが。

男１　住めるんですね、人。
女１　おかしな男だね。
男３　おかしいのはどっちだ！
　　人間は元々森で暮らしてたんだ。
　　社会に飼いならされた犬め！
男１　いったいいつからここに。
男３　さあな。前はどこかの島に漂流した少年みたいに、
　　岩肌に日付を刻んでいたが、そんなことは無意味だと分かった。
男２　一体何・・かすみでも食べて生きてるのか？
男３　黙れ。帰った帰った。
女１　帰れるならとっくに帰ってる。
男２　いやね、僕たち道に迷ってしまっているんですよ。
男３　バチ当たりな野郎ども。

ゴロゴロと遠くから微かに雷の音がする。

男３　雨だな。久しぶりの恵みだ。
女１　え？雨？
男２　じゃあやっぱり今ここを動くのは危険か？
男１　それか、動くなら今すぐですかね。むしろ。
男２　動いたところで、こいつが帰り道を案内してくれなきゃ、
　　どうにもならんだろ。
男３　知らん。

男３、穴の中に戻ろうとする。

女１　いいじゃないの、教えてくれたって。
　　だって自分の生活を邪魔されたくないんでしょう？
　　私たちこのままじゃここで一夜を明かすことになるわよ。
　　それでもいいわけ？

間。

男３　忘れた。

間。

女１　なんですって？
男３　俺ぁ、ここから出る必要がないし、
　　出たいとも思わないからな。
男２　え？
　　じゃああなた、道分からないんですか？
男３　道なんてあったか？
男２　はあ？
男３　野垂れ死んだらそん時はそん時だ。
　　自分の責任ぐらい自分でとりな。
　　せっかく３人出会ったんだから、
　　仲良く出口を探してどっか行け。
女１　あきれた。
　　無理ね、話にならない。

女１、その場を立ち去ろうとする。

男２　いや、ちょっとあなた。
　　どこ行くんです。
女１　村に帰るのよ。
男１　え、今日はもう疲れたとか何とかいってませんで
　　したっけ。
女１　いつか帰るんだから今帰ったって明日帰ったって一緒。じゃあね。

女１、その場を立ち去る。

男１　行ってしまった。
男２　無駄だと思うが。
男１　追いかけますか？
男２　うーん。
　　追いかけたところでなあ。
男１　でもあの人、大丈夫ですかね？
男２　まあでも、止める権利無いんじゃないか。
男３　ほっとけほっとけ。
　　お前らも早く行け。
男２　でも、雨降るんですよね、これから。
男３　いいんじゃないか、雨に打たれるのも。
男２　いやいやそれでここ抜けれなかったら、

男１　・・・そうですね。
男２　え？
男１　首くくるとね、糞尿垂らしたり体液が身体中の穴という穴から
漏れ出るそうじゃないですか。
でも雨が降れば、そういったものも地面に綺麗に
流してくれるんじゃないかなあって。
まあ関係ないんですけどね、死んだら。
でもどうせなら、綺麗に死にたいじゃないですか。
男３　気色悪い。死を美化するな。
男２　ていうかまだあきらめてなかったんですか。
男１　あきらめるも何も、そのために来ましたからね。
男２　悪いこと言わないからやめときなよ。
なんだってそんなこと。
男１　・・・・。
男２　まあ言いたくないなら言わなくてもいいけど。
男１　・・消えたいんですね。
男２　は？
男１　ですから、消えてしまいたいんです。
肉体がある限り、忽然と消えることなんてできないんだけれど、
なんていうか、私がこの世界に存在してた痕跡ごと、
消してしまいたいんですよ。
男２　全然わからねぇ。
男１　あなた、言ってましたよね。
森の途中で誰かの叫び声を聞いた気がするって。
私もそうなんです、実は。
男２　え
男１　首をくくる木を探していて、
彷徨い歩いて、歩いて、歩き疲れて、
ふっと身体の力が抜けたときに、
誰かの長い長い叫び声を聞いた気がしました。
男１　でも私は気づいた。
体が張り裂けそうになるこのつんざくような叫びは私自身だと――
男２　それは・・
男３　そうだろうさ。
男２　え
男３　この山では見たくないものも、隠しているものも。
すべて見えてくるもんだ。

男１　はあ・・
男２　なに言ってるんだか。

女１、どこかから戻って来る。

男３　また来やがった。
女１　いったいどういうことなの。
　また逆戻り。
　どっちに行ったらいいのかさっぱり分からない。
男１　諦めた方がいいのでは。
男２　やっぱり今日はここで、夜を明かすか。
男３　やめとくれ。
男２　でも穴の外に死体が増えるのもやだろ？
男３　それはそうだが。
女１　あたしは何としてでも帰るよ。
男３　無駄だ。
女１　じゃあね。

女１、またどこかに去ろうとする。
女２がどこからともなくやってくる。
歩くたびに鈴の音がする。

女２　こんにちは。

男１、男２、女１、少したじろぐ。

男３　誰だ。
男１　こんにちは・・
女１　あんたも見ない顔ね。
　村のもんじゃないだろ。
男２　若い女性が１人でこんなところに・・

女２、微笑む。

男２　ああ、嫌な予感がする！
　僕、聞いたことがあるんですよ。
　山姫っていう、山の妖怪、美しい女の姿をしていて、

その女に出会ったものには災いが降りかかるとか・・
男１　まさか。
男２　いや、もしかして・・もしかするかもしれませんよ？
だってじゃあ、なんでこんなところに１人でいるんです？
男１　自殺じゃないですか。
女１　あんたじゃあるまいし。
男３　ああもうるさい。なんなんだ、あんたは。

間。

女２　祈らせてください。

唖然とする一同。

男１　はい？
女２　ですから、祈らせてください。
女１　祈る？
女２　駄目でしょうか。
祈らせていただけませんか。
男２　祈るって何を、誰に、
え、なんかあれか、宗教的な・・
女２　（無視して）なんて立派な木なんでしょう。
美しく生きているこの森を見守っているかのよう。
男３　なんだか知らないが、帰った帰った。
女２　帰りません。行くのです。
男３　どこに行くんだ。
女２　この先の祠（ほこら）へ。
男２　祠？
女２　この山の頂上は神の坐す場所。
そこで私の舞を捧げるのです。
女１　なんのために？
女２　山の神の怒りを鎮めるためです。
女１　それがあんたの祈りだってのか。
女２　ええ。
男２　それは・・誰かに頼まれたのですか？
女２　いいえ、そういうわけではありません。
今人間たちは自然への敬意を忘れ、我欲のままに

生きて美しい自然を破壊したり、汚染したり、
好き勝手やっています。
ですから山の神は怒っておられます。
私は日本全国の神の坐す山を巡り、祈りを捧げて
地を鎮めているのです。
男３　お前さん、巫女さんか何かか。
女２　滅相もない。私はただのなんでもない女ですよ。
男３　訳が分からん。
女２　それでいったい誰が救われるっていうんだ。
男３　あなたはこの山の神を信じていないというのですね？
信じているもいないも、神ってのはただ人間が勝手に作った概念で、
ここにはむきだしの自然がある。ただそれだけだよ。

遠くから雷鳴が聞こえる。

男３　ほらもう、雨雲が近い。
どうするんだ？
女２　私は行きます。
男２　いや危ないですよ！
どうするんですか途中で雷に打たれでもしたら。
女２　受け止めます。
男２　なんですか受け止めるって。
女２　覚悟はできています。
女１　勝手にしたらいいさ。
あたしもやっぱり帰ろう。
家で子供が待ってるだろうし。
村の皆が心配して入り口まで探しに来てくれてるかもしれない。
男１　でも道分かるんですか？
女１　分からないけど何とかなるんじゃ。
男２　ならないですよ！
逆にもっと迷ったらどうするんですか？
女１　こんなにロープがあるんだから、これを目印にすれば。
男２　それはやりました。
女１　え？
男２　ロープは目印になりませんよ。
むしろ惑わせられます。というかこれが目印になるなら
とっくにこの森抜けれてます。

女２　皆さん、では、お気をつけて。

女２、去ろうとする。

《シーン３》

地響きのような音が辺りに響き渡る。

女２立ち止まる。

男２　今、あっちの方、光らなかったか？

男１　いよいよですかね。

男３　降るぞ。

女２　早く行かねば。

さらに大きな音が響き渡る。

女１　これ、今落ちたんじゃ。

女２　まさか。

男３　落ちたな。

女２、その場から離れて歩き出す。

男２　ちょっとちょっと、危ないですよ。

男３　ちょうどいい、お前らもあの女についていけよ。

女１　あ、雨？

女１、手のひらを空にかざす。

男１　降ってきましたね。

男２　冷えて来たな。

男３　じゃあな。

男３、穴の中に戻ろうとする。

男２　ちょっと待ってくださいよ。僕たちも中に・・

またおおきな音が響く。

女２、戻って来る。

女１　おや。
女２　行き止まりです。
女１　この先？
女２　大きな木が倒れていて。
　　ちょっと通れそうにないですね。
　　別の道を探さないと。
男２　やっぱりそっちは正しい道じゃないんですよ。
男３　歩きやすい道が正しい道とは限らん。
　　だから道なんてないんだよここには！

間。

女３　こっちよ。こっち。

間。

女２　え？いま・・
男１　どうしました？
女２　いえ、気のせいかも。
　　何か聞こえたような。
男２　風の音じゃないですか。
女３　こっち。
女１　え？
女２　あれ？
男３　なんだ？
女１　今、やっぱり人の声が。
女２　聞こえましたよね？
男２　やめてくださいよ、
男１　あっちです、あっちから・・・

男１、ふらふらと森の中へ入って行ってしまう。

男２　ちょっと、待ってくださいよ・・・！
　　くそ、どうしたら。
女１　やっぱり私は帰る。

雨が降って来たから、村の皆が喜んでいるはずだ！
男２　綺麗な水はどうしたんですか！
女１、その場から走り去る。
男２　ちょっと皆さん・・
あれ？
気づくと、男３は穴の中へ戻っている。
女２　嫌な予感がしますね。
何もなければいいのですけれど。
男２　何ですか嫌な予感って。
女２　私の勘はよく当たるんです。
女３　こっち、こっちよ・・・
女２　行かなければ。
男２　どこへ？
女２　止めないでください。
女２、その場を立ち去る。
男２　おおい！一体どうすれば・・
皆戻ってきてくださいよ！
ああ、どうしよう。
女３　ここでやめるの？
男２　え？
女３　ここで待ってるの？
男２　いや、それはそうだが・・
でも・・・え？いったい。
女３　じきに雨は止むよ。
男２　そんな・・・
男２、声の主と会話するように、自然と森の奥へ迷い込んでいってしまう。

《シーン４》

男１、一つの木を見つめて、「そこにいる自分」に話し掛けている。

男１　ああ。そんな頼りない枝で大丈夫？
今度こそ失敗しないといいね。
きりきり、きりきり、縄のしなる、良い音だ。
ぎりぎり、ぎりぎり、歯が鳴るね。
よく鳴るもんだ。
早く、地面から足、離しなよ。
ちょっと背伸びして、向うを見るだけさ。
べろは閉まっておきな。みっともない。
どう。いい気分だろう。
すべてが緩んでさ、カイホウされて、
ジュウになってくだろ。
え？消えれそう？
（突如、笑いだして）
消えれるかよバーカ。
てめぇ分かってんだろ、ぶらぶら揺らされて、
血ぃ止まって酸素いかなくなってどす黒くなんだよ。
雨風にさらしっぱで、肉はちょっとずつ腐って、
ヘンな匂いが立ち込めて、
溶けた内臓は骨にへばりついて、
たかった虫と抜け落ちた髪の毛をぽとぽと落としながら待つんだよ。
それでも見つけてくれるのをさ！
ああ馬鹿らしい。

女３は近くでその様子を見つめている。

女３　ここにいたのね。
男１　ああ、また誰か来たよ。
今日は随分邪魔が入るなあ・・・
（女３の方をみて）え・・
女３　なにしてるの。
男１　どうしてこんなところに。母さん。
女３　良かった、探していたのよ。
男１　え。

女３　急にいなくなるんですもの。
男１　いや、その、別に。
女３　帰りましょう。
男１　嫌です。
女３　何を。
男１　ほっといてください。
女３　何が。
男１　あなたには関係ないんです。
女３　どうしてそんなこと言うの。
男１　こんなとこで何してるの。
女３　こっちのセリフなんですが。
男１　母さんね、見てられない。
女３　もう見てられないの。
男１　なにも知らないくせに。
女３　え？
男１　なにもわからないくせに！
女３　あなたが頑張ってきたのは、母さん、誰よりも知ってるはずよ。ずっと見てきたんだもの。
男１　はは、頑張ってきた、ですか・・
女３　そうよ。あなたはいつだって優秀で、何でもできて、母さんの自慢の落ちこぼれで悪かったな！
男１　なにを言ってるの？
女３　私はあなたの思い通りの人間なんかじゃありませんよ。
男１　なに言ってるの、あなたは立派な人間です。
女３　

女３、静かに男１の前を立ち去るが、男１は変わらずに女３がいた場所を見つめて１人で話している。

男１　・・・でも、ですか？
男１　私が仕事で間違いをおかしてしまっても？
男１　信じたくないでしょうけど、事実なんですよ
男１　誰でも！？私は間違えたりしないんだ！

男1　こんな醜態さらせるか。
話したところでどうなる？
がっかりされて終わりだろ。

男1　あぁ、もういいさ、ちょうどこの森はおあつらえむきだ。
誰にも見つからない場所で野垂れ死ぬのを待ってたが、
なかなか死ねなかったのはお前がいたせいだな。
でもいいだろう、
どこまでもお前からは逃げてやる。
逃げて逃げて、本当に誰にも見つからない場所で
この世とおさらばするんだ。

男1、駆け出して去る。
女1の小さく叫ぶ声が聞こえる。
女1、女3の前にやってくる。

女1　（腕を押さえて）痛っ・・
なんだなんだ、ヒルか、はたまた・・・
とにかく消毒しないと・・
水・・
あぁ、だめだよこんな汚い雨に曝していちゃあ。
綺麗な水でないと・・
お母さん。

女3　そう、それに私には可愛い子供が喉を乾かして待ってる・・

女1　お母さん、喉乾いた。

女3　駄目なんだよ、喉乾いたからってそこらへんの泥水を
がぶ飲みしちゃあ。
いったいどんな病気になるのか分かったもんじゃないからね。

女1　頭がぼうっとするよぉ。
大丈夫大丈夫、人間水を飲まなくても何日間かは
生きることができるんだからね、辛抱をし。
それより今母さんはこの傷口を洗わないと・・

女3

ふいに、水の流れる音が聞こえてくる。

女1　水・・・水だよ・・・

女1、岩の割れ目から流れている湧き水を発見する。

女1　あぁ・・

女1、水をすくって一口飲む。

女1　冷たい・・

女1、ごくごくと水を立て続けに飲む。

女1　はぁ・・

女1、続いて腕を水にさらし、傷口を洗う。

女3　お母さん、僕にもお水をください。

女1、やっと女3（子供）の存在に気が付く。

女1　なんでお前がここに・・・
　母さんについてきてしまったのかい・・
　危ないから待ってなさいとあれほど言ったのに。

女3　水が飲みたい・・冷たいお水。

女1　待ってな、ほら、ここに綺麗な水が・・・
　あれ？

もう1度振り返ると湧き水は枯れ果てている。

女1　そんな・・・さっきまで水が・・
　どうして・・

女3　僕のお水は？

女1　今、ここにあったんだよ。

女3　お母さん、僕の分も飲んじゃったの？

女1　違うよ、そんなわけないだろう・・
　私はいつだってお前が一番大事で。

女3　嘘つき。

女1　違う、だってまさか水がなくなるなんて・・

女3　お母さんは自分が助かればいいんだね。

女1　そうじゃない、私はお前に・・・
あぁ、でもどうしてさっき私は・・
自分の為にこの貴重な水を・・・
女3　苦しいよ母さん・・体が熱いんだ。
女1　ごめんねぇ、母さんはお前を助けようと・・
女3　母さん、もう僕、よく前が見えないんだ・・・
女1　いやぁああ！
駄目だよ、お前を死なせるわけには・・・

女1、叫びながら森の奥へと半狂乱で姿を消す。

男2、足を引きずりながら女3のいる場所へと迷い込んでくる。

男2　ここは・・なんなんだろうなあ。
今まで行ったどの場所とも違う、なんだか森全体が生きて
呼吸をしているみたいだ。
俺もこの森で1人で一夜を明かせば、
危険な目に遭えるんだろうか・・

・・　例えば、断崖絶壁に行く。風が吹き抜けて、足元を覗けば、
波が岩に打ち付けられて、砕け散って。
でもそのギリギリまで足を進める。あと一歩、いやあと数センチ、前
に行ったら落っこちてしまう場所。
心臓がバクバクして、全身の血がさーって引いて、ふっ、と後ずさっ
たら、ああ戻って来た、生きてる、ってすごい感じるんだ。
その瞬間のために、その瞬間がほしくて、色々行ってきたんだった・・
でもこんなところでびびってるなんてな・・

女3、ゆっくりと男2の方を振り返る。

女3　この先は危険だよ。
男2　っ・・！お前は一体・・・！
ば、化け物・・・！？
女3　よく見てごらん。
男2　・・ほ、ね・・？
女3　ここで死んだんだ。
男2　や、やめてくれ・・・

男２、後ずさる。
女３、男２を追い詰めるようにじりじりと距離を縮めていく。
男２、後ろから風を感じてふっと立ち止まり、後ろを確認する。

男２　あ、危ない・・
女３　そんなとこに立ってちゃ、危ないよ。
　後ろは深い穴だよ。
　落っこちたらどうなるだろうねえ。
男２　やめてくれ、俺は別に死にたいわけじゃない。
　スリルを求めてるだけだ。
女３　じゃあ、今最高の気分だろう。
男２　いや、あ、足がガクガクする・・・
　（ゆっくり穴の方に向き直って、覗き込み）
　あぁ・・真っ暗で吸い込まれそうだ・・
　この先を覗きたいけど・・
　体が・・そっちに行っちゃ駄目だって・・

男１、男３、女１、女２が布をかぶるなどして出てくる。
男２の目には骸骨の亡霊に見えている。

男２　なんだ・・
　みんな死んでいたのか・・・？
　そんな、じゃあ僕はいったい今まで・・

男１、男３、女１、女２が男２に無言で近づいてくる。

女３　あなたは一人・・・
男２　いよいよほんとに遭難か・・
　俺もしかばねの一つになるのか・・
　死ぬ瞬間は、生きてるってことを感じられるのかなあ・・

男１、男３、女１、女２が男２に襲い掛かろうとする。

男２　あああもう、どうにでもしてくれ・・・
　でも俺が生きた証ってのを、どこかに残したかったな。

男２、気を失う。男１、男３、女１、女２は散る。

《シーン５》

女２、地に五体を預けながら祈っている。

女２　鎮まり給え・・鎮まり給え・・
この山に座す太古の神よ・・
怒りの矛を納め、穏やかなる息吹と恵みを我々に・・

雷鳴の音。

女２、顔を上げる。

女２　私の祈りが届かないというのか・・・
いや、そんなことはない。
今までだって、私は神に祈りをささげ、
様々なことから人々を救ってきたではないか・・・
きっとこの地は何か悪しきものが入り組んでいるに違いない。
でも、私が立ち向かわねば。

女２、立ち上がると、女３が女２とぴったり背中合わせになる。

女２　何者だ。
女３　何者だ。
女２　私にまやかしは効かぬ。
女３　私にまやかしは効かぬ。
女２　邪魔をするな。
女３　邪魔をするな。
女２　離れろ。
女３　離れろ。
女２　ついてくるな！
女３　ついてくるな！

女２、イライラしながら影を振り払おうと辺りをぐるぐる回っていると、
穴に片足がはまって身動きが取れなくなってしまう。

女２　くそ、こんなところで・・・
ところで誰なんだ、さっきから。

女3、姿を見せる。

女2　・・・あなたは。
女3　我が地を侵略しにきた者よ。
女2　違う！私はただ人々の為に・・・
女3　誰に望まれた？お前の身勝手な行いではないのか。
女2　だとしても、誰かが救われるのならば良いではありませんか。
女3　救われる？本当に？
女2　・・あなたは神ではないのですか。この山の。
女3　だとしたら？
女2　どうかお鎮まり下さい。
女3　願い事は聞けぬ。
女2　どうして。あなたが神ではないからですか？
女3　ここに神なぞいない。
女2　私の信じてきたものを否定するとおっしゃる！
女3　そもそもお前は信じてきたのか？
女2　え？
女3　山にいる神の存在を。
女2　もちろんです・・
女3　一度も疑ったことはないのだな？
女2　それは・・はい。
女3　一度も疑ったことはないのだな？
女2　はい。
女3　一度も疑ったことはないのだな？
女2　はい。
女3　一度も疑ったことはないのだな？
女2　はい。
女3　お前に何ができる？
女2　私に・・何が・・
女3　答えられないのか。
女2　私はただ祈り、人々を救うことが使命です。
女3　神とやらはお前の事は救ってくれないようだな。
女2　・・いいのです・・
人々が少しでも苦しみから解放され、病めることなく、
平穏で健やかなる日々を過ごすことこそが私の幸せ・・・
人々の笑顔を見ることができれば私は何よりも
嬉しく、そのためには私はどうなっても・・・

女２　　これくらい・・耐えられるはず・・
　　耐えるのです・・
　　あぁ！どうして見てらっしゃるのに何もしてくだ
　　さらないのです？・・助けて。

女２、体の力が抜け、這いつくばるようにして穴から抜け出て、その場に突っ伏している。

男３のいる穴の中。
穴の外から動物の唸り声や獣の遠吠えが聞こえる。

男３　　やっと静かになった。
　　誰にも邪魔されない、俺の、俺だけの空間。
　　この穴だけが俺を守ってくれる。
　　しかし妙な胸騒ぎがしやがる。
　　今夜はなかなか寝付けそうにない・・

穴の外から鳥の泣きわめく声が聞こえる。

男３　　なんだ、何かあったのか・・？
　　まあいい、俺には関係のないことだ。

穴の外に男１、男２、女１、女２がそれぞれ集まって来る。
おびただしい足音が聞こえる。

男３　　あいつら、皆戻って来たのか・・？
　　また追い払わなくちゃあ・・

男３、穴の外へ出る。

男３　　おいお前ら、人が休んでるときにうるさ・・
男１　　どこまでついてくる気だ！
　　いくら母親だからってゆるされないぞ！
　　言っても分からないなら・・（ロープをもち）
　　縛りつけてやる！
女１　　駄目だ・・見当たらないよ・・いくら探しても・・
　　滝も水も・・

お前、もうすぐの辛抱だからね、
男２　あぁ、母さんをそんな目で見つめないでおくれ・・
俺はもう死んだのか？
それとも生かされているのか？
お前等みたいにここで骨になるのは嫌だ！
女２　でもなんだ、ずっと声が聞こえてやがる！
神よ・・お許しください。
私はあなたの存在をずっと信じていたのです。

でも、どこかで疑う気持ちがあったのも事実でした。
今目の前に存在を感じているあなたは・・
神でないとしたらいったい・・
それを考え続けろと言うのでしょうか・・

男１、男２、女１、女２の視線の先には女３が佇んでいる。

男３　お前ら、揃いも揃ってどうした？
一体何を・・

男３、彼らの視線の先、女３を見つめる。

男３　なんだ・・ありゃあただの、鳥じゃないか。

その瞬間、男１、男２、女１、女２が一斉に男３の方を振り向く。
女３が男１、男２、女１、女２の間を縫うようにして男３に歩み寄る。

女１　「私は与える」
男２　「私は生かす」
女２　「私は恵み」
男１　「私はもたらす」

男３　・・いったいこれは・・
まるで皆、あの鳥にそそのかされているような・・

男１　「ここはすべてが生きる森」
女２　「想いが飛び交う山」
男２　「朽ちていく植物の種は落ち」

女１　「命は繋がれる」
男３　そんなこと分かっている！
俺は誰よりもこの森の事をよく知っているつもりだ！
そこらへんの人間と、こいつらと一緒にするな！

男１　「私を踏み荒らすな」
男２　「動物や虫をむやみに奪うな」
女１　「木々を用いるな」
女２　「私を制圧しようとするな」

男３　それは他の人間どもが勝手にやって来て
やってるんだろう！
俺は森を痛めつけるようなことは何もしていない！
そんなことをするのはあいつらみたいな自己中な
奴らだけだろう・・・！

女３　お前も人間だろう？

男３　それはそうだが・・

女１　生きていくために何をした
男１　何を奪った
女２　何を傷つけた
男２　何を失った

男３　俺は何も悪くない！
だいたい、何かを奪わなきゃ生きてけないだろうが！

間。

男３　もうやめだ、やめにしよう、
こんなに夜が白んできちまって・・

男３、穴へ戻ろうとする。
男１、男２、女１、女２、男３を引き戻す。

男３　なにするんだ！

構わないでくれ、ここにいさせてくれ。

女３　なぜ？

男３　ここは、やっと確保した場所なんだ。
俺は人間が嫌いだった。
でも動物にもなれなかった。
まだ人として生きてた記憶が染みついちまってるんだな、
この体に・・・。

女３、静かに手を上に上げ、ゆっくりと下げる。
男１、男２、女１、女２は体の力が抜けたように地面に崩れ落ちる。
男３は女３に触れようとするが、女３はふいとかわして森の奥へと消えていく。

女３　誰が私に触れるだろうか。

《エピローグ》

朝陽が昇り始める中、霧が立ち込め始める。
男３、女１が怪我をしているのを見つけ、起こそうとする。
女１、弾かれたように飛び起き、

女１　水・・あの子に水を・・・！
あたしは大事な水をなんてことしちまったんだ。
・・・ごめんよ・・ごめんよぉ。

間。

女１　お前に今度こそ綺麗な水をってねぇ、思ってたのにねえ。
役立たずな母さんだねぇ・・
でも母さん、この山で探し続けるよ。
お前にあげる水を。

女１、覚悟を決めたように森へ入っていく。

男1、寝そべりながら目を開け、つぶやく。

男1　まただ。まただよ。どうして死ねないんだ。

男1、むくりと起き上がる。

男1　あぁ・・行かなきゃ。

男3　死ぬのか。

男1　いいえ。分からなくなった。

だから逃げ続けます。

なんだか希望が湧いてきました。

男3　なんだそりゃ。

男1　きっとあなたには理解できません。

男3　なんとなく分かるよ。

男1　なんとなくですか。

まぁ、なんとなくでも、少し嬉しいです。

では。

男3　おう。

男1、山を下る道へと歩を進めていき、去る。

男2、男1の足音で目を覚まし、

男2　あれ、あの人！行っちゃったんですか！

男3　みたいだな。

男2　でも、なんだか、大丈夫そうですね。

男3　お前はどうするんだ？

男2　僕はやっぱり、

行けるところまで行ってみようかと。

見てください、朝陽に照らされて、

山の斜面がすごく綺麗だ・・

男3　感動してるのか？

男2　いつ死んでもいいように、瞬間瞬間の景色を、

目に焼き付けようと思いまして。

あぁ、でもこんなに綺麗な景色を見れるなんて、

僕はもう、死の世界に片足つっこんでるのかなあ。

男3　さあな。

男2　ま、どっちでもいいです。

男３　そうか。
男２　では。

男２、道しるべ用のロープを結んで山奥へ入っていく。
男３、その後ろ姿を見送ると、
懐からナイフを取り出し、
ロープを切り落とす。

男３　これ、なくてもいいよな。

男３、次々にロープを切り落としていき、そのまま山へ入っていく。

一人取り残された女２はゆっくり起き上がり、
昇ってきた朝陽を見て、静かに手を合わせる。

女２、狂ったように舞い、祈りを捧げる。
女３は微笑みながら静かにそれを見つめている。

終